

Aichi
Biodiversity
Potential Map

あいちの生物多様性ポテンシャル

気づく・まもる・
つなげるマップ

愛知県
平成22年10月



はじめに

私たち「ひと」は、様々な生きものの一員であり、自然から様々な恩恵を受けて暮らしています。しかし、ひとの営みの規模が拡大するにつれ、知らず知らずのうちに、他の生きものの棲みか（すみか）に影響を与え、その結果、絶滅の危機に瀕している生きものが増え続けています。数多くの生きものとそれらが生き続けることができる場所を守ることは、私たち自身の暮らしの基盤を守ることにつながることに気づかなければなりません。

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」は、簡単に言うと、生きものがすみ続けていくことができる場所を示したマップです。

実際に生きものがすんでいる場所のほか、森や草地、水辺などの分布や広さといった環境条件から、生きものすみかとして適している場所を予測して示しました。

もし、このマップのとおり生きものを見つけたら、その生きものがすみ続けるために何が大切なのか考えてください。そして、それを守ってください。

もし、マップのとおり生きものがいなかったら、何かマップでは分からない原因が、その生きものが生きるための条件を壊しているかもしれません。それを、地域の皆さんで相談し協力して直してあげてください。皆さんの暮らし場所に、生きものが戻ってくるはずですよ。

地域の皆さんが力を合わせて「ひと」と生きものが一緒に暮らせるふるさとあいちを作っていきましょう。

あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ 活用の手引き 目 次

はじめに.....	1
生態系ネットワークについて.....	3
マップについて.....	4
マップに示されている内容	4
生態系ネットワークの「指標種」	5
マップの構成	8
マップの活用.....	9
マップを活用する機会	9
マップを活用する際の基本的な手順	9
マップ活用シート.....	10

ひとと生きものも、自然の恵みに支えられている

あいちに暮らし、働き、学ぶ私たちは、奥山から里地・里山、田園、都市、沿岸に至る、変化に富んだ自然に囲まれています。こうした変化に富んだ自然環境は多様な生きものを育み、豊かな生物多様性の基盤になっています。

あいちをはじめ伊勢湾を取り囲む地域には、約500万年以上前から、木曾三川が運搬した砂礫や粘土の堆積によって作られた丘陵地が連なっています。湧き水が出るような赤土斜面の谷間や丘陵地に湿地や湿原が点在し、そこには「東海丘陵要素植物群」と呼ばれる植物群（シデコブシ、シラタマホシクサなど）や、我が国最小のトンボであるハッチョウトンボやヒメタイコウチなどの貴重な動植物が今もひっそりと生きています。

このような特徴的な自然環境はまた、伝統的にモノづくりの地であるこの地域の産業の糧となり、暮らしを支えてきました。陶磁器や醸造、機械、木工、繊維、そして全国有数の農業や水産業など、私たちは自然環境を利用し、食料や資源、水などの恵みを受けて、産業を発展させ、暮らしてきたのです。

あいちの生物多様性が迎えている危機

かつて、ひとが自然を利用するために作った「ため池」や「湿田（冬でも湿っている水田）」「土水路（土で作った水路）」、薪や肥料を得るために手が入れられてきたコナラやアベマキなどの「二次林」などの、いわゆる里地・里山は、ひとと生きもの共生する場所でもありました。

ところが、戦後、化石燃料や化成肥料への転換・普及によって、二次林を管理する経済的な理由が失われ、伝統的な里地・里山の管理は行われなくなりました。また、山地における人工林の拡大、丘陵地や平野における都市域の拡大、河川や水路・ため池・海岸のコンクリート化、海の埋め立てなどが進み、生きもの生息・生育空間は急速に失われていきました。

そのため多くの生きものが減少し、その結果、県内の絶滅のおそれのある野生の生きもの現状を示す『レッドデータブックあいち2009』には1,208種が掲載される状況になっています。『第一次レッドデータブックあいち』（2001、2002年）と比べると、244種で絶滅の危険性が増加方向に変更され、絶滅のおそれがある種（絶滅危惧Ⅰ、Ⅱ類）は、植物480種（植物全体の約18%）、動物275種（動物全体の3%）、合わせて755種（全体の6%）にも上っています。

自然の保全と持続可能な利用を両立するために「生態系ネットワーク」を。

経済的な効率を高め、豊かな暮らしを得るために行ってきたことが、時に自然の持つ再生力を超え、生きものの生息・生育空間の消失につながってきました。これに対して、経済との両立を図りながら、効果的に生きものの生息・生育空間を守り、再生し、創出していくために考え出された方法が**生態系ネットワークの形成**です。

「生態系ネットワーク」の基本的な考え方は、生きものの生息・生育地を「コアエリア」として保全・再生すると同時に、これらを帯状や飛び石状に連なる自然空間である「コリドー（回廊・通り道）」によってつなぐことによって、生きものが移動できるようにするものです。

例えば、アカガエルが暮らす水辺や森は「コアエリア」に、移動する草地などの経路は「コリドー」にあたります。また、トンボが繁殖する池は「コアエリア」に、トンボが餌となる虫を捕食しながら飛んでいく通り道は「コリドー」にあたります。森や水辺といった自然を、公園や学校の緑地、街路樹、企業や住宅の植栽などで結びつけることによって、地域全体で生物多様性を取り戻していく、これが「生態系ネットワーク」です。

県全体で「生態系ネットワーク」を形成するためには、様々な取り組みの蓄積が必要です。個々の取り組みを効果的なものとするためには、県全体の「生態系ネットワーク」を意識しながら、自らの取り組みが果たす役割を認識して活動していただくことが大切です。

あいちに残された、奥山から沿岸域に至る多様な自然環境を有機的につなぎ、経済活動との両立を図りながら生物多様性をより豊かなものとしていくために、「あいち自然環境保全戦略」では「生態系ネットワークの形成」を主要な取り組みとしています。

あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップについて

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」には「生態系ネットワーク」において大切と考えられる場所が示されています。様々な方がこのマップを見て、生態系ネットワークについて考え、協力して取り組んでいただくことによって、これまで個々に行われてきた取り組みが一定の方向に向かい、より高い効果が発揮されることを目指しています。

普段は生きものや自然にあまりなじみのない方でも、このマップを眺めているだけで、ご自分の家や学校、職場の周りなど身近な場所に様々な生きものがあることを実感できると思います。

そして、地域で暮らし、働き、学ぶ皆さんが、住民、NPO、企業、学校、自治体などといったそれぞれの立場から、協力して「生態系ネットワーク」を実現し、生物多様性の保全と再生に取り組んでいただきたいと思います。

生態系ネットワークの形成は、**あいち固有の自然を取り戻すと同時に、あいちの自然と人が育んできた原風景を取り戻し、地域への愛着を高めることでもあるのです。**

このマップの使い方

家庭や学校、工場、事業所、公共施設などでのビオトープづくりや自然再生、公共工事などの各種事業、環境保全型農林業、自然を守る計画づくりなどで、このマップを見て、「生態系ネットワーク」をつくる方法を考えてみてください。

ビオトープをつくる際に、あるいは植樹しようとする際に、そのビオトープや緑地が、より広い自然のネットワークの中でどのような役割を果たす場所となるのか考えてください。多くの生きものは、ひとつの場所だけで生きていくのではなく、周りの自然との関わりの中で生きているのです。

周回の自然との関わり、保全・再生の積み重ねが、将来の世代に自然の恵みを受けることのできる持続可能な県土を手渡すことにつながっていくはずですよ。

なお、生態系ネットワークの目標は、生物多様性の保全・再生の状況を反映しながら定期的に見直すものとします。それとともに本マップも改訂・充実させていく予定です。

マップのタイトル「気づく・まもる・つなげる」には次の意味があります。



まずはマップを眺めてみてください。あなたが暮らす（働く、学ぶ）地域にはどんな生きものが生きているのか、今は生きものがいなくても、ひとが手を貸せば生きものが生きる場所に変わられることに気づいてください。



生きものにとって大切な場所を知り、その場所と、そこに生息・生育する生きものを守るために何ができるのか考えてください。地域でできることはありませんか。職場や学校でできることはありませんか。工事を行うときに工夫できることはありませんか。



生態系ネットワークを作っていくために、大切と考えられる場所を知り、つなげる方法を考えてください。今は生きものがいなくても、配慮によって生息・生育できる場所に変えたり、身近な自然をより豊かなものに変えていくことができます。

さらに、その場所と他の場所をつなげることによって、あいちの自然全体をより豊かなものにしてください。かつて、この場所にあった原風景を取り戻し、未来の子どもたちへと受け継いでいってください。

生態系ネットワークについて

野生生物の多くは、一つのタイプの生息空間で一生涯を完結しているわけではなく、採食・休息・繁殖、あるいは一日、一年、一生涯を通じて複数の異なるタイプの生息空間を利用しています。たとえば、ニホンアカガエルは、卵・オタマジャクシの時は、田んぼや湿地などの浅い水域、子ガエルは草地、親ガエルは林で生活しています（右図参照）。マガモの仲間は、ねぐらとなる池沼と食物をとる草地や農地の間を毎日移動しています。



また、ある生物の集団が孤立すると遺伝的な多様性が失われてしまうため、他の集団との繁殖交流をするために、移動できる範囲内に同じタイプの生息・生育空間が複数存在していることが必要です。さらに、ある生物の生息・生育空間がなくなってしまった場合でも、その生物が移動できる範囲内に同じタイプの生息・生育空間があれば、その地域から絶滅する危険を減らすことができます。

このように、生物多様性を守っていくためには、同じタイプの環境や、異なるタイプの環境がネットワークされていることが必要です。これを「生態系ネットワーク」と呼びます。

「生態系ネットワーク」を検討するうえで参考となる、効果的な生物生息空間の配置のしかたとして、次の考え方が知られています。

生物の生息空間の効果的な配置のしかた

優	劣	
		なるべく広いほうがよい
		同面積ならひとつにまとまっていたほうがよい
		分割する場合には、分散させないほうがよい。
		線状に集合させるより、等間隔に集合させたほうがよい
		生態的回廊(コリドー)でつなげたほうがよい
		できるだけ丸いほうがよい

Diamond, J. M. 1975 より作成

これを参考にして、考えられたのが「生態系ネットワーク」形成の基本的な考え方です。

まず、生物の生息・生育空間となる「コアエリア」（本マップでは、大型哺乳類や猛禽類などの生息空間となる規模の大きなものを【大拠点】それ以外を【拠点】と区分して呼びます）をできるだけ広い面積で保全・再生することによって生物が安定的に生息・生育できる環境を確保します。これを帯状や飛び石状の自然地である「コリドー」（本マップでは【回廊】と呼びます）でつなぐことにより生物が移動できるようにします。また、「コアエリア」と「コリドー」の周辺に広がる区域は「マトリックス」（本マップでは【基盤環境】と呼びます）として、自然の質の向上を図る（たとえば、スギ・ヒノキの単純林を広葉樹が混交する林に転換する、住宅地の樹木を増やすなど）ことによって、生態系ネットワークの形成を助けるようにします。

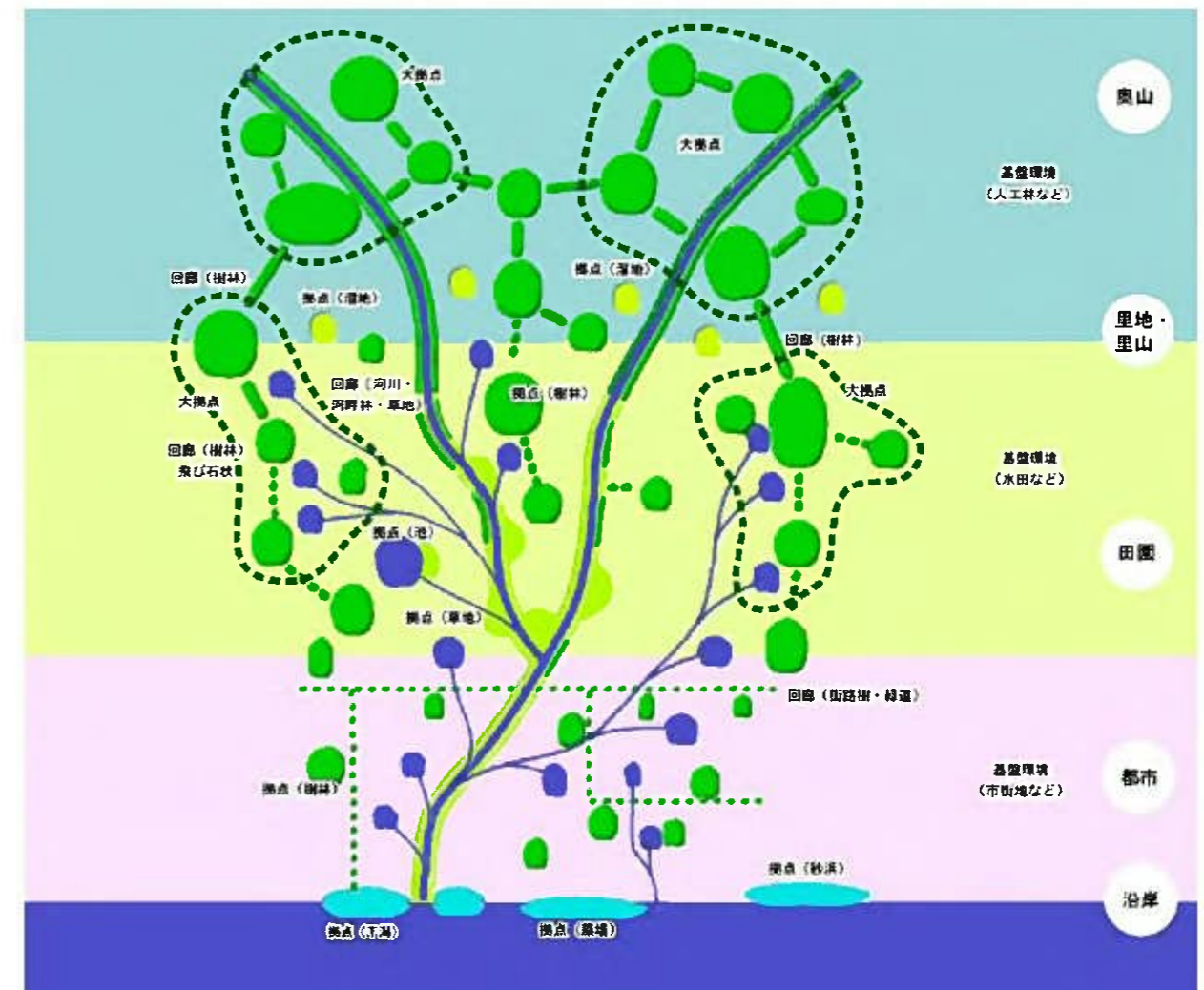
以上が「生態系ネットワーク」形成の基本的な考え方ですが、前述のように、生物の種類によっては、異なる環境を移動しているものや、飛翔するために「コリドー」を必要としないものもあります。

したがって、「生態系ネットワーク」を考える場合には、単純に「コアエリア」を「コリドー」で結ぶのではなく、生物の生態を考えたうえで、ネットワークの方法を考える必要があります。

生態系ネットワークの構成要素

大拠点 (コアエリア)	・食物となる生物が多い質の高い自然と広い生息空間が必要とされる大型哺乳類（ツキノワグマ）や猛禽類（クマタカ・オオタカ・サシバなど）の生息地
拠点 (コアエリア)	・動植物の安定的な生息・生育地 ・希少種などが集中して分布する場所
回廊 (コリドー)	・大拠点や拠点をつなぎ、生物の移動や遺伝子の交流を可能とする生態的な経路 ・帯状のものほか、飛び石状のものがある
基盤環境 (マトリックス)	・大拠点、拠点、回廊の周辺域に広がる環境 ・大拠点、拠点、回廊の緩衝区域や地域全体における自然の質の向上を図る役割を持つ

※大拠点の中には、拠点そのものの面積が広いものだけでなく、いくつかの拠点が回廊で有機的につながった構造になっているものもあります。



生態系ネットワークの構成要素（大拠点・拠点・回廊・基盤環境）の配置イメージ

※本図をベースに作成した生態系ネットワークの形成イメージは6ページをご覧ください。

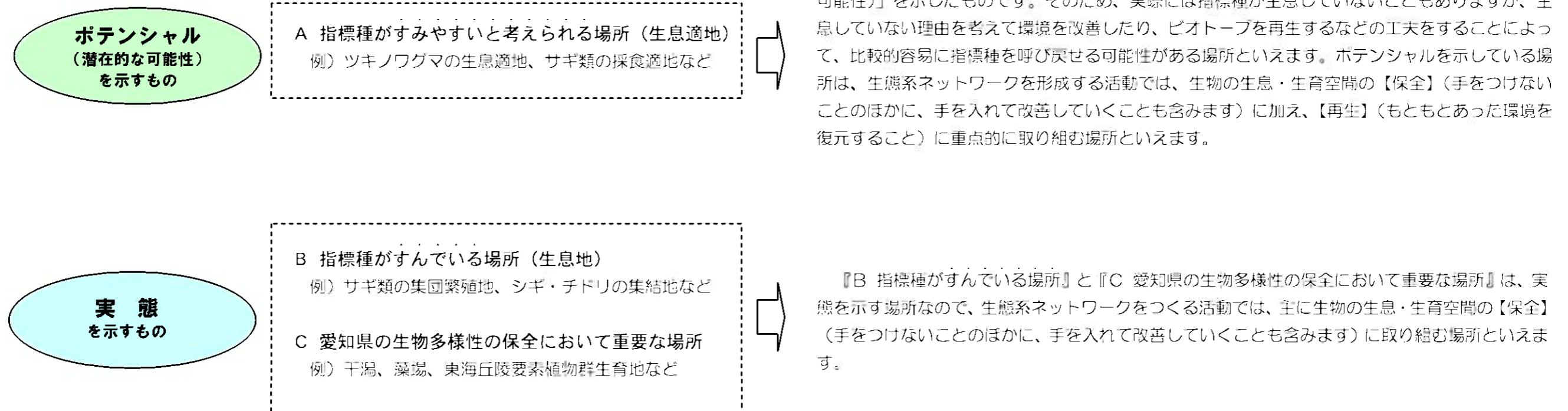
マップについて

ここでは、マップを活用する際に知っておいていただきたい、マップに示されている内容やマップの構成などを説明します。

マップに示されている内容

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」には、指標種[※]がすみやすいと考えられる場所（生息適地）、指標種がすんでいる場所（生息地）、そして愛知県の生物多様性保全において重要な場所が示されています。

これらは、「ポテンシャル（潜在的な可能性）」を示すものと、「実態」を示すものに分けられます。「ポテンシャル」と「実態」では、生態系ネットワークを考える際の扱い方がやや異なることから、違いに留意してマップを活用してください。



※指標種：愛知県の生態系ネットワークの代表として選定した生物。選定の考え方や選定した指標種は次のページをご覧ください。

生態系ネットワークの「指標種」

地域の生態系は多くの生物から成り立っており、それぞれの生物が異なる生態を持っています。したがって、生態系ネットワークについて検討する場合には、できるだけ多くの種類の生物を対象とすることが理想です。しかしながら、対象種が多くなると検討が複雑になることや、検討のために必要な生物の行動、生息・生育場所のデータが十分でないなどの課題があり、多くの生物種を対象とすることは現実的には難しい状況です。

そこで「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」の作成にあたっては、生態系を構成する生物から、複数の生物を代表するものや生態等のデータがあるものを生態系ネットワークの「指標種」として選定して検討を行いました。ここで気をつけていただきたいのは、生態系ネットワークは、この「指標種」だけを対象としたものではなく、「指標種」の生息環境を保全・再生し、ネットワークすることにより、生息環境が同じ生物種をはじめとする、多様な生物を守ることを目指している点です。

※指標種と関係のあるその他の生物は『マップ活用シート』に整理しました。

(1) 指標種選定の考え方

「指標種」は、主に次の観点から選定しました。なお、指標種については、新しい情報や知見を反映し、順次追加修正していく予定です。

① 上位性や指標性を持つこと

「指標種」は、複数の生物を代表する生物であることが望まれます。そこで、「上位性」や「指標性」を持つ生物から選定しました。

上位性：生物の食う・食われる関係の上位に位置していること。上位性を持つ生物が生息していることは、食物となる生物など、多くの生物がいることを意味しています。

指標性：同様の生息・生育環境を必要とする複数の生物を代表していること。

② 県内の地域を網羅すること

県内の様々な地域で生態系ネットワークが検討できるように、全体として奥山地域、里地・里山地域、田園地域、都市地域、沿岸地域を網羅するように選定しました。

③ 様々な環境を網羅すること

異なる環境の生態的ネットワークが検討できるように、森林、草地、湿地、池沼、河川などの環境を網羅するように選定しました。

④ 行動圏などの生態がわかっていること

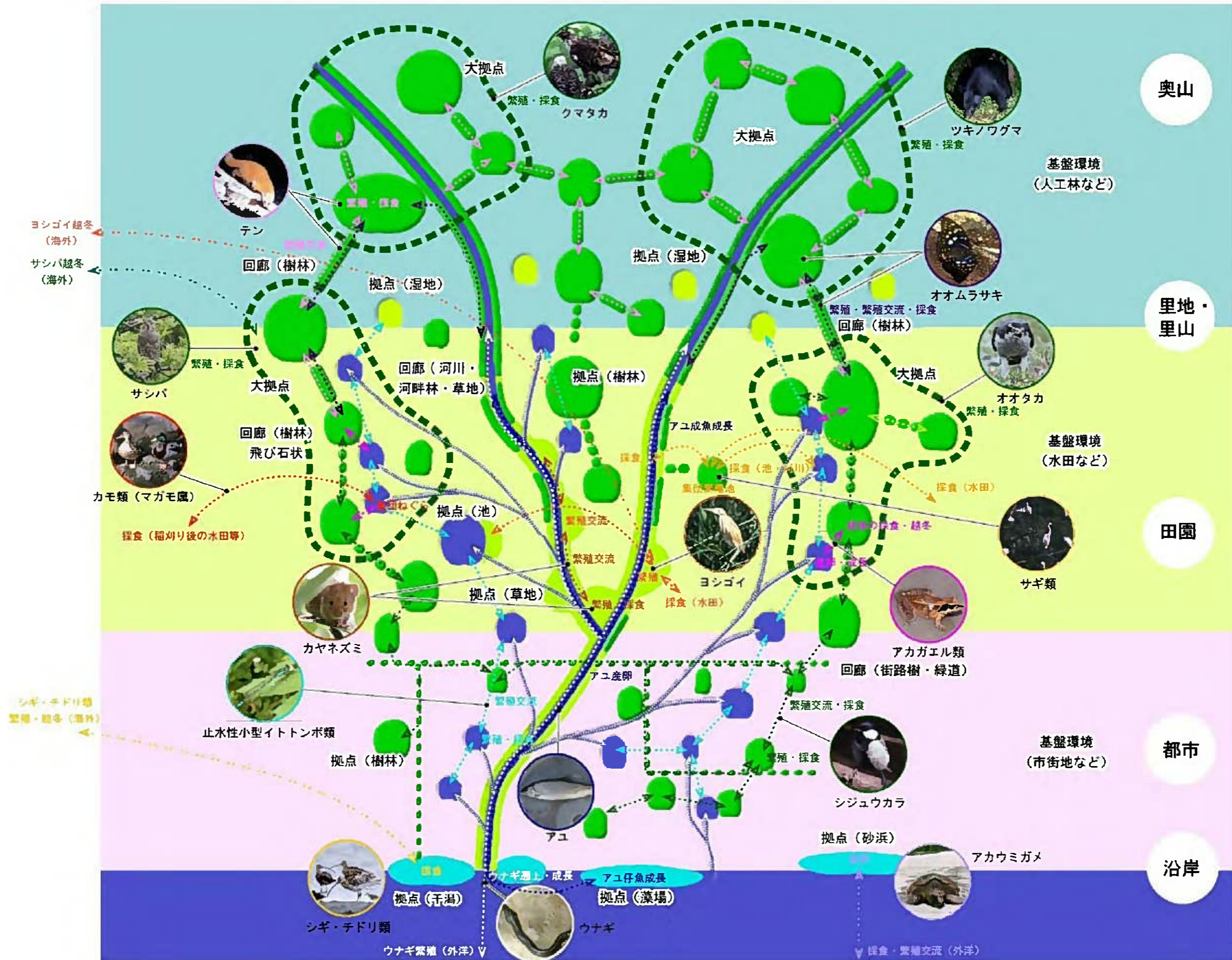
指標種の生息適地を予測してマップに示す必要があることから、その生物の生態に関する科学的な知見が一定程度あるものから選定しました。

(2) 選定した指標種

(1)の考え方に基づき、次に示す生物を指標種として選定しました。指標種の生態系ネットワークにおける位置をイメージとして次ページに示します。

種名	上位性	指標性	地域				環境等
			奥山	里地・里山	田園	都市	
カヤネズミ	●		○	○	○	○	草地・湿地
ツキノワグマ	●	●	○				森林
テン	●	●	○	○			森林
サギ類	●	●	○	○			池沼・河川・水田(採食) 森林(営巣)
ヨシゴイ	●	●	○	○			湿地 (春に渡来し、繁殖、秋に渡去)
カモ類(マガモ属)	●	●	○	○			池沼・河川(休息) 草地・乾いた水田(採食)
オオタカ	●	●	○	○			森林・草地・畑・乾いた水田、湿地、水田等
サシバ	●	●	○				森林・草地・水田等 (3月下旬に渡来し繁殖、9~11月に渡去)
クマタカ	●	●	○				森林
シギ・チドリ類	●	●	○				干潟 (多くは渡りの途中での立ち寄り)
シジュウカラ	●	●	○	○	○	○	森林
アカウミガメ	●	●					砂浜 (外洋で生息し、産卵のために上陸)
アカガエル類	●	●	○	○	○	○	池沼・水田(幼生) 草地・湿地(幼体) 森林(成体)
アユ・ウナギ	●	●	○	○	○	○	河川 (ウナギは、外洋で産卵し、稚魚が河川を遡上)
止水性イトトンボ類	●	●	○	○	○		池沼
オオムラサキ	●	●	○	○			森林

生態系ネットワークにおける指標種の生息場所と移動をイメージとして示します。




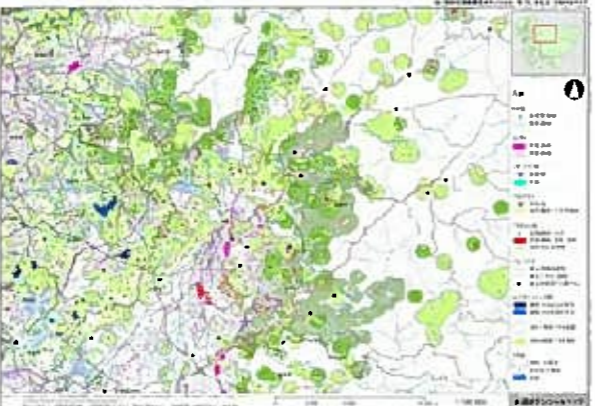
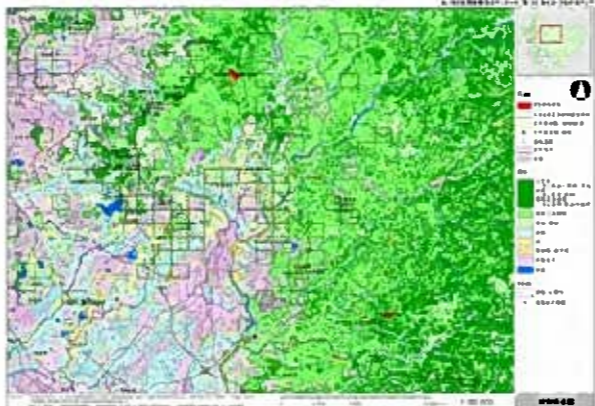
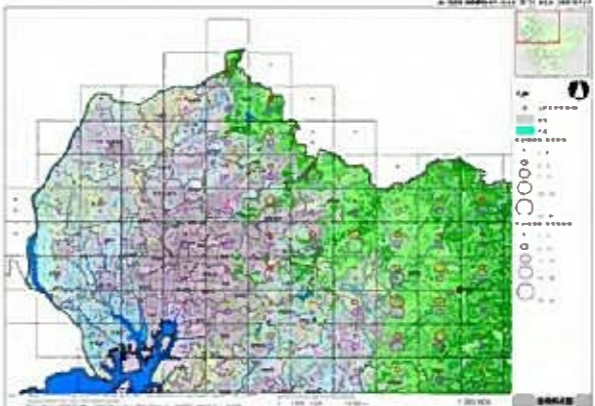


地域別・環境別に「生息する可能性がある主な生物」を整理し、指標種を赤字で示しました。

環境	種類	地域				
		奥山	里地・里山	田園	都市	沿岸
森林	植生タイプ	ブナ林・シイ林・カシ林・コナラ林・スギヒノキ人工林	シイ林・カシ林・アカマツ林・コナラ林・スギヒノキ人工林	シイ林・カシ林・エノキ林・コナラ林	シイ林・カシ林・コナラ林・エノキ林	シイ林・タブノキ林・ウバメガシ林・クロマツ林
	哺乳類	ミズラモグラ・ヒミズ・チチブコウモリ・コテングコウモリ・テンゴウコウモリ・ニホンザル・ノウサギ・ニホンリス・ムササビ・モンガ・ヒメネズミ・ツキノワグマ・テン・アナグマ・イノシシ・ニホンジカ・カモシカ	ニホンジネズミ・コウベモグラ・ヒミズ・ヤマコウモリ・アブラコウモリ・ノウサギ・ニホンリス・ムササビ・アカネズミ・タヌキ・キツネ・テン・イタチ・アナグマ	ニホンジネズミ・コウベモグラ・アブラコウモリ・アカネズミ・タヌキ・キツネ	コウベモグラ・アブラコウモリ・アカネズミ・ドブネズミ・クマネズミ・ハツカネズミ・タヌキ	コウベモグラ・タヌキ・キツネ・イタチ
	鳥類	クマタカ・ヤマドリ・フクロウ・コノハズク・ブッポウソウ・ツツドリ・アカショウビン・アカゲラ・オオアカゲラ・アオゲラ・コマドリ・コリリ・マミジロ・クログミ・アカハラ・キビタキ・オオルリ・ヤブサメ・センダイムシクイ・ヒガラ・シジュウカラ・ヤマガラ・キバシリ・ゴジュウカラ・カケス	サギ類コロニー・オオタカ・サシバ・ハチクマ・キジバト・フクロウ・アオバズク・アオゲラ・コゲラ・ヒヨドリ・モズ・サンショウクイ・クログミ・キビタキ・オオルリ・ウグイス・センダイムシクイ・サンコウチョウ・シジュウカラ・ヤマガラ・メジロ・ホオジロ・カシラダカ・カケス・ハシブトガラス	サギ類コロニー・オオタカ・フクロウ・アオバズク・コゲラ・モズ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・ハシブトガラス	チョウゲンボウ・アオバズク・キジバト・コゲラ・ハクセキレイ・シジュウカラ・メジロ・スズメ・ムクドリ・ハシブトガラス	キジバト・コゲラ・ヒヨドリ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・ハシブトガラス
	爬虫類	ジムグリ・アオダイショウ・タカチホヘビ	シマヘビ・ジムグリ・ヤマカガシ・カナヘビ・ヤモリ	ヤモリ・カナヘビ・シマヘビ・ジムグリ・ヤマカガシ	ヤモリ・カナヘビ・シマヘビ・アオダイショウ	ヤモリ・カナヘビ・シマヘビ・アオダイショウ
	両生類	ヒダサンショウウオ・ハコネサンショウウオ・ヒキガエル・ヤマアマガエル	ヒキガエル・アマガエル・ニホンアマガエル・ヤマアマガエル・モリアマガエル	ヒキガエル・アマガエル・ニホンアマガエル	ヒキガエル・アマガエル・ニホンアマガエル	ヒキガエル・アマガエル
	昆虫類	コエゾゼミ・エゾゼミ・ミヤマクワガタ・オオチャイロハナムグリ・オオトラカミキリ・ヨコヤマヒゲナガカミキリ・フジミドリシジミ・キベリタテハ・オオムラサキ	ミンミンゼミ・ヒグラシ・ハルゼミ・ミカワオサムシ・ノコギリクワガタ・クロカナブン・カブトムシ・ミヤマセセリ・ギフチョウ・ミズイロオナガシジミ・オオミドリシジミ・アカシジミ・ウラナミアカシジミ・オオムラサキ	ニイニゼミ・コクワガタ・カナブン・クロアゲハ・アゲハ・ムラサキシジミ・ゴマダラチョウ・ルリタテハ・サトキマダラヒカゲ	クマゼミ・アブラゼミ・ツクツクボウシ・アオスジアゲハ・アゲハ	オオゴキブリ
草地・畑・乾いた水田	植生タイプ	ススキ群落	ススキ群落・オギ群落・畑地雑草群落	ススキ群落・オギ群落・畑地雑草群落	ススキ群落・オギ群落	ススキ群落・オギ群落
	哺乳類	ヒミズ・ノウサギ・ニホンジカ	ニホンジネズミ・アズマモグラ・ハタネズミ・アカネズミ・カヤネズミ・ノウサギ・タヌキ・キツネ・イタチ	ニホンジネズミ・アズマモグラ・ハタネズミ・カヤネズミ・ノウサギ・イタチ	コウベモグラ・ハタネズミ・カヤネズミ・ハツカネズミ・タヌキ	コウベモグラ・ハタネズミ・カヤネズミ・ハツカネズミ・タヌキ
	鳥類	ホオアカ	マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ・オナガガモ(マガモ属)・オオタカ・サシバ・キジ・コムシズク・チョウゲンボウ・ヒバリ・ツグミ・セッカ・ホオジロ・カシラダカ・ホオアカ・カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス	アマサギ・マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ・オナガガモ(マガモ属)・オオタカ・キジ・コムシズク・チョウゲンボウ・ヒバリ・モズ・ツグミ・セッカ・ホオジロ・カシラダカ・オオジュリン・カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス	キジバト・ツバメ・ハクセキレイ・ヒヨドリ・ツグミ・カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・ハシブトガラス	キジ・キジバト・ハクセキレイ・イソヒヨドリ・ツグミ・ホオジロ・カシラダカ・ホオアカ・カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス
	爬虫類	シマヘビ・アオダイショウ	トカゲ・カナヘビ・シマヘビ・ジムグリ	トカゲ・カナヘビ・シマヘビ・ジムグリ	カナヘビ	トカゲ・カナヘビ・シマヘビ・ジムグリ
	両生類	アマガエル	マツムシ・ショウリョウバッタモドキ・ギンイチモンジセセリ・ウスバシロチョウ・スジグロシロチョウ・ジャノメチョウ	ショウリョウバッタ・トノサマバッタ・クルマバッタモドキ・コバネイナゴ・モンシロチョウ・ツマキチョウ・キタキチョウ・キタテハ・ヒメジャノメ・ヒメウラナミジャノメ	オオカマキリ・エンマコオロギ・オンブバッタ・イチモンジセセリ・キアゲハ・モンキチョウ・モンシロチョウ・ウラナミシジミ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・ツマドリヒョウモン・ヒメアカタテハ	アマガエル
	昆虫類			ヨシ群落・マコモ群落・水田雑草群落・ヤナギ林・湿原湿地植物群落	ヨシ群落・マコモ群落・ヤナギ林	ヨシ群落
池沼・河川・湿地・水田	植生タイプ	ツルヨシ群落	ハンノキ林・シデコブシ林・ツルヨシ群落・ヨシ群落・ヤナギ林・湿原湿地植物群落	ヨシ群落・マコモ群落・水田雑草群落・ヤナギ林・湿原湿地植物群落	ヨシ群落・マコモ群落・ヤナギ林	ヨシ群落
	哺乳類	カワネズミ	カヤネズミ・イタチ	カヤネズミ・イタチ	カヤネズミ・イタチ	カヤネズミ・イタチ
	鳥類	カイツブリ・カワウ・ヨシゴイ・ミゾゴイ・ササゴイ・ゴイサギ・アマサギ・ダイサギ・チュウサギ・コサギ・アオサギ(サギ類)・マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ(マガモ属)・ホシハジロ・オオタカ・サシバ・ヒクイナ・クイナ・イカルチドリ・コチドリ・ケリ・タゲリ・タマシギ・イソシギ・カワセミ・キセキレイ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・タヒバリ・オオヨシキリ・セッカ・カシラダカ・オオジュリン	カイツブリ・カワウ・ヨシゴイ・ミゾゴイ・ササゴイ・ゴイサギ・アマサギ・ダイサギ・チュウサギ・コサギ・アオサギ(サギ類)・マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ(マガモ属)・ホシハジロ・オオタカ・サシバ・ヒクイナ・クイナ・イカルチドリ・コチドリ・ムナグロ・ケリ・タゲリ・タマシギ・イソシギ・トウネン・ツルシギ・クサシギ・タカブシギ・エリマキシギ・チュウシヤクシギ・タシギ・コアジサシ・カワセミ・ツバメ・キセキレイ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・タヒバリ・オオヨシキリ・セッカ・オオジュリン	カイツブリ・カワウ・アオサギ(サギ類)・マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ・オナガガモ(マガモ属)・ホシハジロ・キンクロハジロ・コチドリ・イソシギ・コアジサシ・ウミネコ・ユリカモメ・セグロカモメ・カワセミ・ツバメ・イワツバメ・ハクセキレイ・キセキレイ	カイツブリ・カワウ・アオサギ(サギ類)・マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ・オナガガモ(マガモ属)・ホシハジロ・キンクロハジロ・コチドリ・イソシギ・コアジサシ・ウミネコ・ユリカモメ・セグロカモメ・カワセミ・ツバメ・イワツバメ・ハクセキレイ・キセキレイ・イソヒヨドリ・オオヨシキリ・セッカ・オオジュリン	
	爬虫類	ヒバカリ	シマヘビ・ヒバカリ・ヤマカガシ・クサガメ・イシガメ・スッポン	クサガメ・イシガメ・スッポン・ヤマカガシ・ヒバカリ	クサガメ・スッポン	クサガメ・スッポン
	両生類	ヒダサンショウウオ・ハコネサンショウウオ・ヒキガエル・タゴガエル・ナガレタゴガエル・ヤマアマガエル・モリアマガエル・カジカガエル	カミサシショウウオ・アカハライモリ・ヒキガエル・アマガエル・ニホンアマガエル・ヤマアマガエル・トノサマガエル・ナゴヤダルマガエル・ヌマガエル・ツチガエル・シュレーゲルアマガエル・モリアマガエル・カジカガエル	アカハライモリ・アマガエル・ニホンアマガエル・トノサマガエル・ナゴヤダルマガエル・ヌマガエル・ツチガエル・シュレーゲルアマガエル	ヒキガエル・アマガエル・ニホンアマガエル	ヒキガエル・アマガエル・ヌマガエル
	魚類	イワナ・アマゴ	スナヤツメ・ウナギ・ギンブナ・オイカワ・ウグイ・カワムツ・シマドジョウ・ホトケドジョウ・ナガレホトケドジョウ・ドジョウ・アカザ・ネコギギ・メダカ・シマヨシノボリ・トウヨシノボリ・カワヨシノボリ・カジカ	スナヤツメ・ウナギ・アユ・ギンブナ・オイカワ・ウグイ・モツゴ・タモロコ・ヌマムツ・シマドジョウ・ドジョウ・ネコギギ・メダカ・シマヨシノボリ・トウヨシノボリ・カワヨシノボリ	ウナギ・アユ・ギンブナ・オイカワ・ウグイ・モツゴ・タモロコ・ドジョウ・メダカ・ボラ・スズキ・トウヨシノボリ・ヌマチチブ	ウナギ・アユ・マハゼ・ボラ・スズキ・ピリンゴ・ヌマチチブ
昆虫類	ムカシトンボ・ヒメクロサナエ・ルリボシヤンマ・オオルリボシヤンマ・ナベテタムシ・サワダマゲンゴロウ・オナガミズマシ	オオイトトンボ(止水性イトトンボ類)・ゲンバイトトンボ・アオハダトンボ・ダビドサナエ・タバサナエ・ギンヤンマ・サラサヤンマ・ハラビロトンボ・ハッチョウトンボ・シオヤトンボ・チョウトンボ・マダラナニフトンボ・タガメ・タイコウチ・ヒメタイコウチ・ミズカマキリ・ゲンゴロウ・ゲンジボタル・ヘイケボタル・ヒメヒカゲ	ムスジイトトンボ・ベニイトトンボ・アオモンイトトンボ(止水性イトトンボ類)・ナゴヤサナエ・アオヤンマ・ギンヤンマ・ナツアカネ・マユテアカネ・アキアカネ・タイコウチ・ミズカマキリ・ヘイケボタル	クロイトトンボ・アジイトトンボ(止水性イトトンボ類)・ギンヤンマ・ショウジョウトンボ・シオカラトンボ・コシアキトンボ・ハイイロゲンゴロウ	カワラゴミムシ・オオヒョウタンゴミムシ・キバネキバナガミズギワゴミムシ	
甲殻類	サワガニ・モクズガニ・テナガエビ・スジエビ・ヌマエビ・ミナミヌマエビ	サワガニ・テナガエビ・スジエビ・ヌマエビ・ミナミヌマエビ	モクズガニ・テナガエビ・スジエビ・ヌマエビ・ミナミヌマエビ	モクズガニ・テナガエビ・スジエビ	モクズガニ・アカテガニ・ベンケイガニ・クロベンケイガニ・テナガエビ・スジエビ	
貝類	ヤマトシジミ・ドブガイ・カワニナ・モノアラガイ・ヒメモノアラガイ	ヤマトシジミ・ドブガイ・カワニナ・モノアラガイ・ヒメモノアラガイ	ヤマトシジミ・マシジミ・イシガイ・マツカサガイ・トンガリササノハガイ・ドブガイ・カワニナ・モノアラガイ・ヒメモノアラガイ	ヤマトシジミ・ドブガイ・モノアラガイ・ヒメモノアラガイ	ヤマトシジミ・マシジミ	
砂浜	植生タイプ					コウボウムギ・コウボウシバ群落・オニシバ群落
	鳥類					シロチドリ・ミユビシギ(シギ・チドリ類)・コアジサシ
	爬虫類					アカウミガメ
	昆虫類					オオヒョウタンゴミムシ・オサムシモドキ・ニッポンハナダカバチ
干潟	植生タイプ					シオクグ群落・アイアシ群落
	鳥類					カンムリカイツブリ・ハジロカイツブリ・カワウ・ダイサギ・コサギ・アオサギ(サギ類)・カルガモ(マガモ属)・スズガモ・キンクロハジロ・ハヤブサ・シロチドリ・メダイチドリ・ダイゼン・ハマシギ・トウネン・アオアシシギ・アカアシシギ・オオソリハシシギ・ダイシヤクシギ・ホウロクシギ(シギ・チドリ類)・ウミネコ・ユリカモメ・セグロカモメ・アジサシ・コアジサシ
	魚類					マハゼ・イシガレイ・スズキ・ボラ
	甲殻類					ヤマトオサガニ・チゴガニ・アシハラガニ
	貝類					アサリ・バカガイ・ハマグリ・マテガイ・ウミニナ

マップの構成

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」は、6種類のマップで構成されています。マップ1～4には、主に指標種の生息適地と生息地が記載されています。マップ5・6には主に愛知県の生物多様性の保全において重要な場所以が記載されています。今後、指標種が増えた場合には、マップの種類が追加される可能性があります。

1 大拠点ポテンシャルマップ	2 樹林ポテンシャルマップ	3 草地ポテンシャルマップ
		
<p>食物となる生物が多い質の高い自然と広い生息空間が必要とされる「指標種」の生息適地を示しています。</p>	<p>主に「森林」を生息場所とする「指標種」の生息適地を示しています。</p>	<p>主に「草地」「畑」「乾いた水田」を生息場所とする「指標種」の生息適地と生息場所を示しています。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ● ツキノワグマの生息適地 ● テンの生息適地 ● オオタカの生息適地 ● サシバの生息適地 ● クマタカの生息適地 	<ul style="list-style-type: none"> ● シジュウカラの生息適地 ● オオムラサキの生息適地 	<ul style="list-style-type: none"> ● カヤネズミの生息適地 ○ カモ類(マガモ属)の集団ねぐら ※1 ● " の採食適地
4 水辺ポテンシャルマップ	5 植物拠点図	6 動物拠点図
		
<p>主に「池沼」「河川」「湿地」「水田」「砂浜」「干潟」などの水辺を生息場所とする「指標種」の生息適地と生息場所を示しています。</p>	<p>愛知県の生物多様性の保全において重要な場所のうち特に植物にとって重要な場所を示しています。</p>	<p>愛知県の生物多様性の保全において重要な場所のうち特に動物にとって重要な場所を示しています。また、5キロメッシュごとの希少動物の確認数を示しています。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ サギ類の集団繁殖地 ※2 ● " の採食適地 ● ヨシゴイの生息適地 ● シギ・チドリ類の生息適地 ○ アカウミガメの繁殖地 ● " の繁殖適地 ● アカガエル類の生息適地 ● アユ・ウナギの生息適地 ● 止水性イトトンボ類の生息適地 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 特定植物群落 ○ 東海丘陵要素植物群生育地 ○ 自然度の高い植物群落 ○ 天然記念物(植物) ○ 湿地・湿原 ○ 自然海岸 ○ 藻場 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 天然記念物(動物) ○ 干潟 ○ 藻場 ○ 希少種集中度(脊椎動物) ○ 希少種集中度(無脊椎動物)

記載内容欄の説明 ●:ポテンシャルを示しているもの ○:実態を示しているもの

※1 カモ類の集団ねぐらは池沼、河川などの水辺であるが、採食適地が農地・草地であることから、一括して草地ポテンシャルマップに掲載した。

※2 サギ類の集団繁殖地は樹林であるが、採食適地が水辺であることから、一括して水辺ポテンシャルマップに掲載した。

マップの活用

マップを活用する機会

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」は、次に示すような様々な機会に活用していただきたいと思います。

① 県民やNPO、学校などが生物多様性を保全する活動を行うときに

県内では、県民やNPO、学校などが主体となって、生物の生息・生育空間を保全・再生する様々な自主的な活動が行われています。こうした活動を行うときに、たとえば、学校にビオトープをつくる場合に、このマップで、学校の生態系ネットワークにおける位置を確認してみてください。目標とする生物や、再生するビオトープのタイプを決めるヒントが得られると思います。

また、活動を行うときに、生態系ネットワークについて考えることは、多くの場合、自分たちの活動の意義（たとえば、カモ類の越冬地を守る活動では、国を越えた生態系ネットワークづくりに役立っていること）を確認することにつながると思います。

② 開発行為を行うときに

事業者が開発を行うときに、事業地が生態系ネットワークでどのような位置にあるかマップで確認してください。開発によって消失、分断される可能性のある生態系ネットワークや、消失する可能性のある生物の生息・生育地を把握することによって、影響を最小限に抑える方法を考えるきっかけとなります。

また、都市化が進み、既に自然が失われてしまった場所などでは、開発事業地に池や森を再生したり、生物の生息に配慮した街路樹や、多自然河川を整備したりすることにより、生態系ネットワークの形成に役立てることができます。マップで事業地の生態系ネットワークにおける位置づけを確認することは、自然再生の目標設定に役立ちます。

③ 自治体が計画を策定するときに

生物多様性の保全は、自治体レベルで取り組むことが必要であり、自治体が策定する各種計画において生物多様性の保全を盛り込むことが望まれます。特に、各自治体が公園整備や緑地の保全、緑化について定める「緑の基本計画」を策定する場合は、広域的な生態系ネットワークにおける自治体の位置づけを確認し、計画に反映してください。

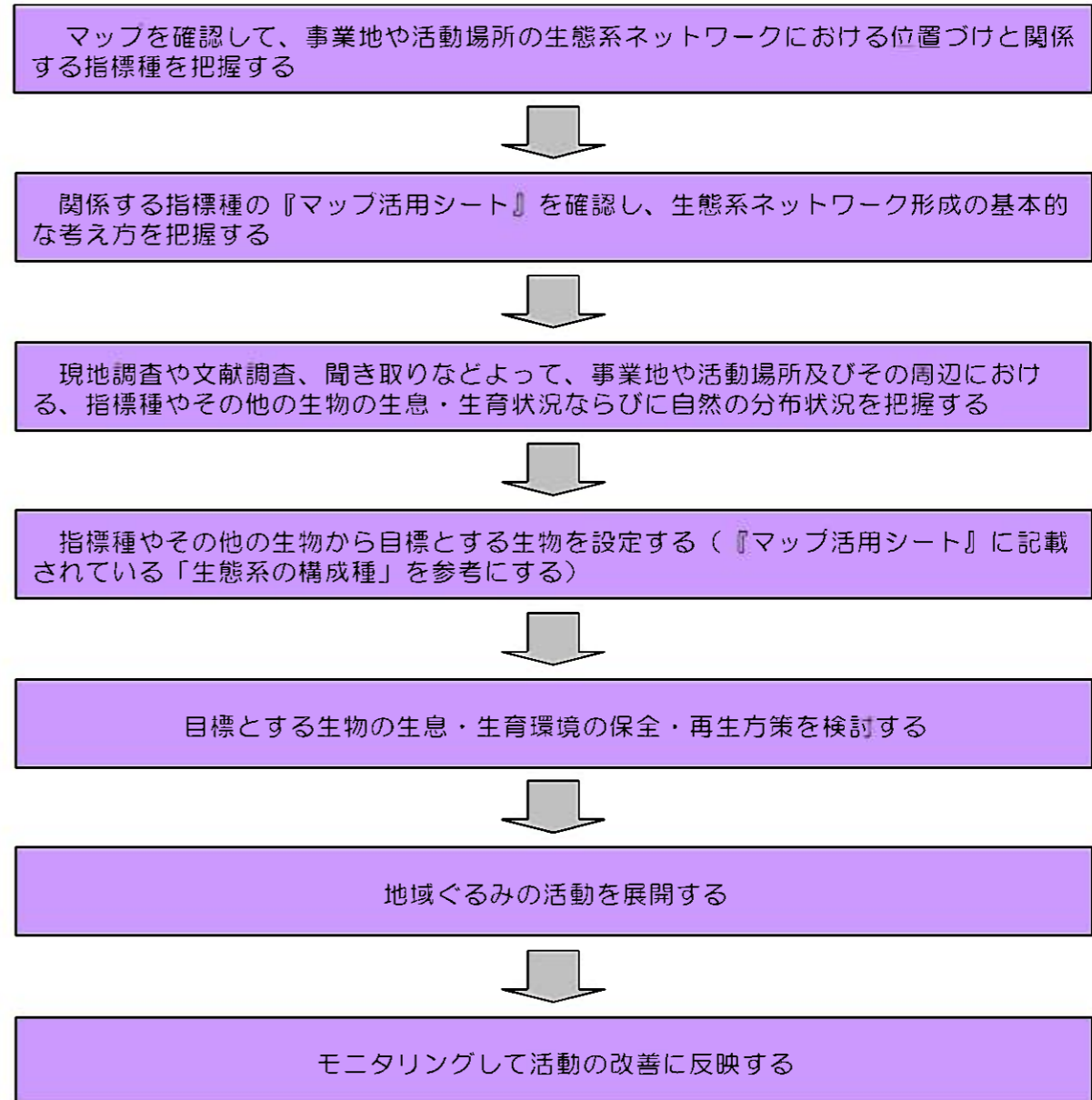
④ 県民が、自分たちの暮らす地域の自然に興味を持ち、地域への愛着を育むために

このマップを眺めているだけでも、身近な場所に様々な生物がいる可能性があることを実感できると思います。活動や事業だけでなく、自分たちの暮らす地域の自然や生物に興味を持っていただくためにも、ぜひ活用してください。

マップを活用する際の基本的な手順

皆さんに「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」を活用していただくために、指標種ごとに生態系ネットワークを形成するための考え方を整理した『マップ活用シート』を作成しました。

次に、マップを活用する際の基本的な手順を示します。



※マップに記載されている内容の多くは、ポテンシャル（潜在的な可能性）を示したもので、生物の生息・生育空間の保全・再生を具体的に実施する場合には、現地調査や文献調査などでの確認が必要になることに注意してください。